

自分描画法 (Self-Portrait Method) と TAT における 心理療法的有用性に関する比較研究

小 山 充 道

Abstract

With the support of research funds we completed additional studies of the Self-Portrait Method (SPM), originally developed by Koyama in 2005, from various perspectives. In this study, we further examine the SPM using graduate students registered at graduate schools for clinical psychologists. These subjects ($n=14$) included 6 first-year MA students and 8 second-year students. All subjects were female. All subjects undertook both the TAT, designed to stimulate life experiences, and SPM, designed to allow subjects to express one's life experience one's self. After undergoing both tests, the subjects were asked to comment on "The points in common and of difference between the SPM and TAT" and "The psychotherapeutic role of and points to remember when using SPM, as well as the possibility of utilizing it." The author then arranged and, based on clinical experience, further modified the comments before examining them.

The results revealed that, as a point in common, "both dealt with pictorial stimulation, and both undertook assessment through pictorial stimulation. They reflect, via nonverbal mediation, such as illustrations and drawing, the feelings, thoughts and images of the test subjects. Further, they activate the self-image and imagination of the test subjects." As differences, the subjects commented that "in TAT, the subject's troubles, insecurities and desires, what we refer to as the subject's 'thoughts,' are hidden and are difficult to present directly. On the other hand, using SPM, we can mention our current Client's thoughts. In addition, with regard to the therapeutic effect, although TAT assessment was useful, the carrying out of TAT itself does not have any benefit, whereas SPM has a cathartic effect in allowing one the "express one's thoughts." In other words, they came to understand, among other things, that the ability to express one's self can be both fun and healing.

キーワード：自分描画法・TAT・心理療法的有用性

I はじめに

筆者創案の自分描画法 (Self-Portrait Method; 以下 SPM と略す) 研究は 2004 年以來、文部科学省科学研究費 (「自己描画法」に関する臨床発達基礎研究～描画の収集と質的分析) や、日本学術振興会科学研究費に基づく「自分描画法に関する臨床基礎研究～思春期・青年期への取り組み」「幼児期の自分描画法 (SPM) に関する臨床

基礎研究」等を受けて、事例研究を含め高齢者から幼児に到るまで、さまざまな視点を加えて検討がなされてきた (小山; 2004、2006、2007、2013 他)

本論文では同じく、動きのある生活場面を描いた絵画を刺激図とする TAT とさまざまな比較を行うことにより、SPM の特徴と心理療法場における SPM の有用性を明らかにする。

II TAT と SPM の概要

小山 (2012) によれば、TAT という用語が最初に用いられたのは、1935 年 Archives of Neurology & Psychiatry 誌に発表された “A Method of Investigating Fantasies: The Thematic Apperception Test” というタイトルの論文であった。本論文は Morgan, C. D. と Murray, H. H. の共著として発表された。本論文は当初 “A Method for the Investigation of Unconscious Phantasies” というタイトルで、ある学術雑誌に投稿したが受理されなかった。査読者の一人であった Ernest Jones は “Unconscious” という用語を使わないで書くことよと指摘した。その意向を踏まえて、本論文は “A Method of Investigating Fantasies: The Thematic Apperception Test” と改題され、Archives of Neurology & Psychiatry 誌に受理された。「無意識的なファンタジーの研究法」と「ファンタジーの研究法」という表題の相違は、神経精神医学という雑誌の特質にあるということだけではなく、エビデンスに基づいた論文を書く、という今日にも通じるエピソードになっている。しかしエビデンスに基づいた論文は自ずと人間の心の表現法に限界がある、というのは心理臨床家の誰もが気づいていることであろう。およそ 80 年前にもあったこの難題は、今を生きる心理臨床家にも難題である。これは人間の心へのアプローチがいかに難しいかを物語っている。端的に言えば、TAT では外界からの刺激絵図に触発され、心の中である欲求が生じると同時にある圧力が生じる。その様態を、投影に絡むある物語の解釈を介してクライアントの心に触れようとする。TAT では「欲求—圧力」のありようを重視する。

一方、SPM は思いの理論 (小山 ; 2002) を背景にしている。Jung, C. G のタイプ論 (1921) を援用すれば、思いとは「思考、感情、感覚、直観などの意識的、無意識的な心的機能すべてを含んだ心の総体」を意味するが、SPM では意識的に獲得される「思考 (ある考え事) と絡む感情 (気持ちの揺れ動き) の塊」をひとつの思いととらえ重視する。SPM の目的は、「“思い” は何かに押し上げられ出現するものととらえたうえで、心理療法の中で、見えにくい心の部分である “思い” を浮き上がらせる道具として用いる」「描画内容 (“思い” の部分) と物語構成 (“思い” の全体) から、“思

い”を重視した対話を行なう手がかりを得る」「発達水準および病的水準の把握がある程度可能。疑いある場合は、他の心理アセスメントを適宜追加実施し、発達水準および病的水準に関する信頼性を高めていく。SPM は発達水準および病的水準に関する情報の一端を与えてくれる」等にある (小山 ; 2008)。比喩的に述べれば、自らの描画行為をとおして、感覚および直観力という気づきのツールを用いてある思いを生じさせ、バウムテストの樹木のごとき根 (自分・隠れているもの) から幹 (背景)、枝 (気になること) を描き、最後に樹冠のありよう (生成された人間の物語) を心の中で綴っていく。

具体例として 19 歳の女性 A が描いた SPM 事例を次ぎに取り上げる (図 1)。

A は気になるものとして「自分の未来 (右上の黒く渦巻く円)」を描き、背景として自分の周りから順に「友人とこれから出会うであろう人」を描き、そして隠れているものとして「心や思考 (足元の影)」を描いた。題名は「みち (道/未知)」。

物語は「『私』が目指しているもの。そこに辿りつくまでに様々な人と出会う。様々な人といろいろな出来事を乗り越える。そして大切な仲間を手に入れる。自分の心や人の心をのぞきながら、考える『私』は何をつかむのか…」と綴られた。A は感想として「絵を立体的に作ることができたらもっとおもしろいと思った」と付記している。

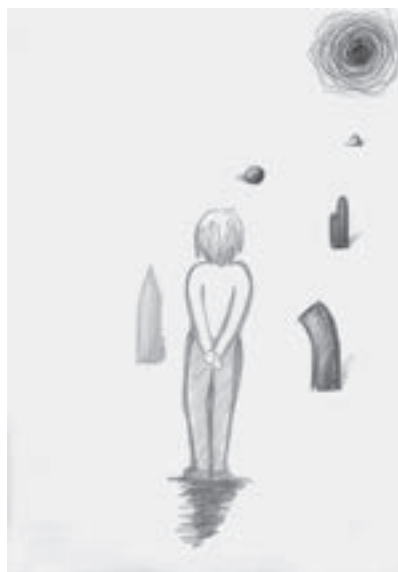


図 1 19 歳女性 A さんの SPM

III 目的

SPM が心理療法において果たす役割と留意点、そして活用について、TAT と比較することで、その特徴と心理臨床現場における活用について明らかにする。

IV 方法

1) 対象

臨床心理士資格取得をめざす大学院生の協力を得て、TAT と SPM の実習を実施した。対象となった大学院生は修士課程 1 年生が 6 名、同 2 年生が 8 名の合計 14 名で、全員が女性だった。彼らは生活場면을刺激素材とした TAT と、自ら自身自身の生活場面および状況（刺激図）を作り出していく SPM の両方を体験した。

2) 実施手順

被検査者は「心理アセスメントに関する概論→

TAT 実習→ TAT カード特徴および分析視点に関する学習（アフターケア）→ SPM 体験→ SPM に関する学習（アフターケア）」の順にアセスメント学習を行った。その後、「TAT と SPM の共通点および相違点、心理臨床場面における SPM の活用の見通し」および「体験後の感想」を寄せてもらった。その後、TAT および SPM に関して、個別に評価を含むフィードバックを行った。全員が欠席することなく同じ体験学習を受けた。

V 結果

以下に、被検査者の実体験にもとづく TAT および SPM に対する特徴に関して、その共通点および個々が固有にもつ特徴を一括整理した。内容の取捨選択および追加・修正等は筆者の責任で行った。その結果、内容は筆者の見解となっている。

(1) TAT と SPM の特徴比較に関する検討

表 1 TAT と SPM の特徴に関する比較表

	TAT の特徴	SPM の特徴
共通点	<ul style="list-style-type: none">・どちらも「絵画刺激」を扱い、「絵画刺激」を通してアセスメントする。被検査者の感情や思考、イメージなどをそれぞれ絵図版や描画といった非言語的な媒介に投射する。被検査者は自分のイメージ、想像力を活性化させる。・自己についての物語を語る。・質問紙調査のように、直接意識的な部分のみを対象とするのではなく、意識と無意識の狭間の部分も対象とする。・クライアントが直面化しにくい心理的問題にふれることができる。クライアントはときに心理的問題について語ることに抵抗を示し、無意識的に否認することがある。TAT や SPM といった投映法、描画法を用いることで、クライアント自身が抱有する心理的問題を間接的に扱うことができる。・アセスメントする際には、信頼関係を築くこと、被検査者の反応から読み取る力量が必要とされる。実施にあたって信頼関係があることが大前提。・クライアントとして取り組む際に、実施に対する意欲が求められる。・セラピストにとっては、「セラピストかつ検査者」という立場で、クライアントの世界観にふれるという体験がある。・被検査者に検査の目的が直接的に伝わりにくい。それゆえ被検査者に戸惑いが生じる可能性はあるが、特段構えることなく検査に取り組むことができるし、反応を故意に歪める可能性が低い。・日常生活では見られない被検査者の思いや行動特徴を窺い知ることができる。・クライアントが置かれている状況を含めた全体的な性格傾向を把握することができる。・解釈が検査者の技量に左右されやすい。・TAT と SPM いずれの利用であっても、クライアントの心と対話するのはクライアント自身であり、セラピストはクライアントが自分の思いに向き合えるような場を提供することが大切になる。	

構造化	<ul style="list-style-type: none"> ・手順と提示図版があらかじめ決まっていて、反応は言語応答のみ。描画行為はない。SPM よりもより構造化されている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・手順のみ構造化されている。それ以外の描画テーマ、表現方法、内容等は描画者の自由選択であり、枠に縛られない非構造化の度合いが高い手法といえる。
目的	<ul style="list-style-type: none"> ・人格力動を査定し、深層を理解する。 ・被検査者の無意識領域を暴露するような空想を起し、根底にある自己抑制的な傾向を露にする。 ・絵図版に現れる人物に自己を投射するため、意識的または無意識的な本人の欲求や感情が現れる。結末をどうしてもハッピーエンドに終わらせたいと思うと幸福な未来が思い描かれる。 ・主にセラピストがクライアント理解を深める道具として用いられる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・被検査者の“今の思い”を把握する。 ・面接において対話を促進させ、かつ被検査者の“思いを深める”ひとつの道具となる。 ・自己に関するものを描く作業を通して、クライアント自身が自己をみつめる。 ・クライアント自身が自分理解を深める道具として、かつセラピストのクライアント理解を深める道具として用いられる。
手順	<ul style="list-style-type: none"> ・施行手順はおおむね決まっている。 ・被検査者は一連の絵を提示され、個々のカードについて何か物語をつくり話すように促される。 	<ul style="list-style-type: none"> ・描画手順はおおむね決まっている。 ・被検査者は「自分」→「気になること」→「背景」→「隠れているもの」の順に描画を求められる。
手法	<ul style="list-style-type: none"> ・言語反応（話をつくる）によってアセスメントを進めていく。 	<ul style="list-style-type: none"> ・主に描画（描画枠のみ設定された自由画）と言語反応（物語る）によってアセスメントを進めていく。
心理療法の立場	<ul style="list-style-type: none"> ・被検査者の気質、情緒成熟度、観察能力、知性、想像力、心理的洞察、創造性、現実感覚、家族間の心理的力動などを精神力動学の視点から把握する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・人間主義的アプローチおよび来談者中心療法の考え方が背景にある。「実存」「自己」「いま、ここに」「対話」「思い」等がキーワードとなる。
時制	<ul style="list-style-type: none"> ・過去・現在・未来を重視し、3つの用語を教示に含む。 ・TAT では、物語づくりにおいて、過去や未来へ「逃避する」ことも可能。 	<ul style="list-style-type: none"> ・“いま、ここに”を重視する。教示には「過去、未来」という言葉は含まれない。今ここに存在する過去、今ここに存在する未来という視点で、過去と未来にふれる。クライアントが抱いている“今の思い”を扱う。クライアントは現在の自分と向き合う。 ・SPM では“現在の”ことを尋ねる。その応用として、教示の際に“過去気になったこと～”や“将来について気になること～”と教示することで、現在以外について問うことはできる。面接中、過去のどこかでクライアントが思い残しを感じているようなら、その頃を思い出してもらいながら SPM に取り組み、面接に生かすという方法もある。
刺激材	<ul style="list-style-type: none"> ・30 枚の既成の図版を用いる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・1 枚の画用紙に自分が描いた絵を取り上げる。そこには被検査者の思いが詰まっているはず。
実施法	<ul style="list-style-type: none"> ・集団法としては実施が難しい。その場合は、「集団 TAT 検査」等を使用する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・個人法、集団法ともに実施可能。
導入時期	<ul style="list-style-type: none"> ・実施時期をとくに選ばない。 	<ul style="list-style-type: none"> ・初回面接時の実施はなるべく避ける。 ・ある程度関係性ができてきたところで、導入すると効果的。 ・SPM ではクライアントは自分自身の問題と向き合わなければならないため、面接初期よりも、ある程度クライアントとセラピストの信頼関係が形成されてから行われる必要がある。つまり

導入時期		治療初期のアセスメントとしてよりも、治療過程でセラピストとクライアントの関係性や治療の進行状況を確認する手法として実施すると臨床的に役立つ。
適用範囲	<ul style="list-style-type: none"> ・幼児から高齢者まで実施可能だが、その際は幼児・児童絵画統覚検査（CAT）や高齢者用絵画統覚検査（SAT）等を用いる。 ・筆記具の使用は必要ないので、高齢者や身体不自由などを抱える人にも利用できる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・幼児から高齢者まで、人を選ばずに実施できる。 ・言語説明が難しい幼児であっても、想像力を働かせることによって楽しく検査を進めることができる。
所要時間	<ul style="list-style-type: none"> ・およそ2時間かかり、長時間を要する。作業量が多いので、2回にわけて施行することがある。 	<ul style="list-style-type: none"> ・短時間で終わることができる。ほとんどの場合、数分から20分程度で終わる。
教示方法	<ul style="list-style-type: none"> ・被検査者は絵図版に描かれた内容を一つの主題としてとらえ、絵に対する物語を作り、劇的構造を意味的解釈つまり統覚するように指示される。 ・教示は次のとおり。「これは、あなたの想像力の検査です。これから私が絵を1枚ずつ見せますから、筋書きなり物語なりを作ってください。その際、その筋書きまたは物語をあらわしたものがこの絵となるようにしてください。絵の中の人物はお互いにどんな間柄でしょうか、この人たちにどんなことが起こったのでしょうか、この人たちは今何を考え、何を感じているのでしょうか、そして話の結末はどうなるのでしょうか、できるだけ想像力を働かせてください。文学的想像を思いっきり発揮していただきたいのです。好きなようにできるだけ詳しいお話をつくってください」。ポイントは、「絵を見てあなたの現実の話をするのではなく、絵から湧き起こった空想の話をして欲しい」という点にある。空想の話をするので、被検査者のテストに対する抵抗は弱められる。被検査者が話さないときは、「それから話しはどのようになっていくのですか？」「どんなことを考えているのでしょうか？」など、適宜、テストの遂行を促すような言葉を与えていく。 	<p>実際の手順はおおむね次の4つのステップを踏む。</p> <p>①『自己像』の描画。つまり「イメージとしての自分」を描く。教示は「では最初に自分の姿全体を、その用紙に自由に描いてください。どのように描いてもかまいませんし、どこに描いてもかまいません」</p> <p>②『自分と関連ある人や物、あるいは出来事』の描画。つまり自分のそばに、気になる人物や物品、あるいは出来事等を描く。教示は「では次に、今気になっている何かを思い浮かべてください。気になっている人でも、物でも、出来事でも、なんでもかまいません。思いついたら、ひとつその用紙のどこかに描いてください」</p> <p>③『自分が置かれている心理的環境』の描画。つまり絵の“背景”を描く。教示は「では今度はその絵、全体にぴったりの感じの背景を描いてみましょう」と伝える。風景画の場合、背景に空が示されていないときは、気分と関連する空をイメージし、描くように促す。</p> <p>④そして最後にクライアントは『この絵のどこかに隠れているものの存在』、つまり深層にふれる。教示は「その絵をよく見てください。何かが隠れています。何が隠れているのでしょうか…何か思いついたら、その絵のどこかに自由に描いてください」といった順序で描画を行いながら対話を深めていく。</p> <p>隠れているものを描くときに、検査者から「おやっ」というような好奇心の伝わるニュアンスで教示をすると、被検査者側も落書きをしているような少し楽な気持ちで絵を描くことができる。</p>
用紙	<ul style="list-style-type: none"> ・被検査者が記入する用紙は配布されない。作業は絵図版を見て、物語をつくるだけである。 	<ul style="list-style-type: none"> ・画用紙が用意されると、上手に描かなければという気持ちが喚起されやすい場合がある。そのときは落書き帳や広告の裏など、何気ない用紙を使用するとスムーズに手が動くことがある。
テーマ	<ul style="list-style-type: none"> ・提示される図版が決まっているので、与えられるテーマが限定される。 	<ul style="list-style-type: none"> ・どのようなテーマを扱っても自由。テーマ選択の自由度が高い。

心理的負担	<ul style="list-style-type: none"> ・所要時間が長く、かつ図版も重苦しいものが多い。心理的負担が感じられる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・短時間でできるため、被検査者に負担をかけずに実施できるが、描画内容によっては心理的負担が増すことがある。
自由度	<ul style="list-style-type: none"> ・TAT では与えられた刺激図版に物語を付随させるため、SPM に比べると作業の自由度はやや低い。 	<ul style="list-style-type: none"> ・どのような絵を描くかはすべてクライアントに委ねられている。そのため自由度が高い。
達成感	<ul style="list-style-type: none"> ・喜びを伴うような達成感はほとんど認められない。 	<ul style="list-style-type: none"> ・作品を完成させることに喜びや楽しさのみならず、達成感も感じることができる。
安全性	<ul style="list-style-type: none"> ・図版から物語をつくるように教示されるので、被検査者の心理的安全性は検査者の関わりに委ねられる部分が多い。 	<ul style="list-style-type: none"> ・信頼関係ができてから、さらに被検査者のタイミングで“ある思いに関わる問題”を取り扱うことができるので、心理的安全性は高い。
抵抗	<ul style="list-style-type: none"> ・重苦しい図版が多く、心理的抵抗が増す場合もある。 ・あくまで画中の人のストーリーとして語ることから、防衛が薄らぎ、抵抗感が和らぐ。 	<ul style="list-style-type: none"> ・絵を描くのが苦手な人もいるし、自分を描くことや、問題としていることを描くことに抵抗を感じ取る人もいる。 ・「自分」を描くため、内的世界が暴露されることを恐れるクライアントは、より防衛的になる恐れもある。
事例性	<ul style="list-style-type: none"> ・被検査者が物語をどのように語るかに事例性が認められる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・描画行動、描画内容、物語の創作すべてに事例性が認められる。
図版の特徴	<ul style="list-style-type: none"> ・最初から図版が出来上がっている。 ・被検査者の心理状態が図版に投影されやすい。 ・既成の絵から話をつくるため、物語の内容の領域が限定される。 ・被検査者が見る絵があらかじめ出来上がっているため、絵図版が、予期せず被検査者のつらい気持ちを喚起する刺激となる危険性もある。 ・TAT で集められた物語の内容の中に被検査者のパーソナリティの重要な構成要素が現れる。それは2つの優勢となる心理的傾向に依拠している。1つは、「人は自分の過去経験と照らし合わせてあいまいな人間の状況を解釈し、欲求を表わす傾向がある」という事実、他は「人は経験の蓄えにあるものと同じように物語る傾向がある」という心理的事実である。 	<ul style="list-style-type: none"> ・自分自身で図版を作り上げていく。 ・被検査者自身が今悩んでいることや問題としていることを画用紙に表現できる。 ・自分が問題としていることが、絵に反映されやすい。絵は自分で作成するため物語のテーマは多彩となり、“その人らしさ”がより出やすい。 ・被検査者自身が用紙上に出す内容や量を調整できるため、自分を守りやすい。しかし自己像を描くため、実施の際に抵抗があるかもしれない。セラピストは被検査者の反応を見ながら、そこにどんな意味があるのかを意識する必要がある。
自己像	<ul style="list-style-type: none"> ・TAT では絵図版に自分自身を投射させるが、これにあまり気づかない被検査者もいる。この場合、検査を受けていても自分自身にはあまりふれていないように感じるだろう。TAT は自分について深く考えることがまだ難しいクライアントにとっては取り組みやすい検査かもしれない。 	<ul style="list-style-type: none"> ・SPM では自己像を描くため、自分のことを考えざるを得ない状況に置かれる。ゆえに「自分自身にふれても大丈夫」だとセラピストが判断したクライアントに適用することが重要。
色彩	<ul style="list-style-type: none"> ・全図版がモノクロで、図版そのものに被検査者が手を加えることはできない。 	<ul style="list-style-type: none"> ・色を用いることもできる。筆記用具として主にクレヨン、色鉛筆、ボールペン、鉛筆、水彩絵の具等を用いるが、特に決められてはいない。 ・自ら色を塗っていくため、色もひとつの解釈の対象になる。被検査者の心理的状态を色合いなどの視点から捉えることもできる。 ・被検査者が絵に用いている色や、描いた絵と色の調和などから、より深い解釈が可能になる。

物 語	<ul style="list-style-type: none"> ・既にある図版をもとにして、過去・現在・未来について物語をつくる。 ・語りにくい図版もあるが、多くが生活場面であるため、何らかの物語は語られるだろう。 ・物語を語ることができる。仮に色彩図版であったなら物語の内容が異なるかもしれない。 ・自ら絵を描くことが苦手な人でも、多様に解釈できる図版によって独自の物語を構成することができる。 ・物語の中には意識的または無意識であるにせよ、その人の感情と欲求が現れるとマレーは考えた。被検査者は絵のある人物に自分自身を投影することによって自分自身を語ろうとするため、TAT に対する反応には被検査者の無意識的な防衛機制も働くであろう。カード絵は想像力のテストとして提示される。 	<ul style="list-style-type: none"> ・1枚の絵を自分で完成させ、それをもとに物語をつくる。 ・“自分が描いた絵”について物語をつくるので、語りにくいということはないはずだが、実際には「語りにくさ」が認められることがある。この「語りにくさ」にも被検査者の今の「思い」が隠されている。 ・「自分が描いた」という思い入れがあり、真剣かつ慎重に物語をつくる可能性がある。また自己像を描いていることから、物語の主人公に自分を投射しやすい。 ・物語の内容として、現在自分が抱えている心理的問題が語られやすい。 ・物語る行為、つまり「まとめる＝振り返り」をすることで、客観的に自分の思いをつかむことができる。 ・提示された絵図版で物語をつくるのが苦手な人でも、SPM では自分の思うように絵を描き色を塗りそれに沿って物語を構成できるので、表現の幅が広がる。 ・物語を作ることが苦痛と感じる人もいる。その場合は配慮が必要。「物語を作るのが苦痛！」ということがわかるだけでも、今後の面接展開の手がかりとなる。
題名・テーマ	<ul style="list-style-type: none"> ・あらかじめ図版ごとに重要視されるテーマが決まっている。語られるストーリーの中に必ず繰り返し用いられる共通のテーマがあり、そのテーマが、実は語り手が現実には抱えている感情や人生のテーマの場合がある。そこから語り手の感情を推測する。 ・図版ごとに多彩なテーマを取り上げている。 ・家族関係や母子関係、異性関係、攻撃性などをテーマにしており、あらゆる角度から被検査者を理解することができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・語り手・描き手が重要だと感じているテーマを扱う。 ・心理的核心に迫った部分が表現される。 ・自分自身をどう捉えているのか、今問題としていいることは何なのかなどというように、被検査者の心の核心をつくものがテーマになりやすい。 ・被検査者がある程度素直に検査に取り組む限りにおいて、被検査者の気になっているテーマが絵になって現れる。
防衛	<ul style="list-style-type: none"> ・現実の自分とは異なる架空の場面を表現するため、防衛機制が働きにくい。 	<ul style="list-style-type: none"> ・現実の自分についてどの程度絵に表現できるかが問われるので、検査者との信頼関係が築かれていない場合、被検査者の率直な思いの丈を、白紙の用紙にぶつけることは難しい。
対象とする意識領域	<ul style="list-style-type: none"> ・投射という間接的手段を用いて、無意識領域にふれる。 ・TATの方がより意識の深い部分を対象としている。 ・TATでは被検査者がまだ気がついていない「気になるところ」を扱うことができる可能性がある。 ・自己の無意識的な側面の理解が可能となる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・絵は「自分像」と「今自分が気になっていること」が意識的の作為にあたり、直接的心理的反映という印象を与える。「背景」と「隠れているもの」は投射という、意識が及びにくい間接的心理的反映にあたる。SPMでは対話が及ぶ範囲、つまり意識領域から意識境界あたりにふれる。 ・SPMでは「今気になっている」ことを描いてもらうため、面接の手がかりとして、まず気になっていると意識していることが取り上げられる。 ・「今はまだ問題にしたいくないことは描かない」というように、被検査者が回避することができる。つまり被検査者は面接展開に対して主体性をもつことができる。

思いの現れ方	<ul style="list-style-type: none"> 被検査者の悩みや不安、欲求といった被検査者の現在の「思い」は隠され、「思い」はダイレクトには現れにくい。 被検査者が過去から抱えている深層的な不安や欲求を把握したい場合は TAT を実施する。 クライアントに様々な図版を提示することで、クライアントの内面を SPM よりも広く刺激する可能性がある。それゆえクライアントの内面を SPM よりも深く知ることができる。 	<ul style="list-style-type: none"> 「今の」クライアントの「思い」にふれることができる。 被検査者の悩みや不安、欲求といった、被検査者の現在の「思い」がダイレクトに現れやすい。 クライアントがその時セラピストに伝えたくない思いは無理に訴えなくても良く、またむやみに刺激されないため、クライアントにとって取り組みやすい技法と考えられる。 被検査者が現在抱えている、ある思い（悩みや欲求）にふれることが有効と判断したときは SPM を実施するとよい。
思いのプロセスを語る	<ul style="list-style-type: none"> すでにある絵について「空想の物語を作る」という教示がなされるため、自分の思いを表出することにためらいがあったり、まだ自分の思いを表出する準備が整っていない被検査者であっても、比較的取り組みやすい。 	<ul style="list-style-type: none"> 被検査者が自分で絵を描いていながら、自分のペースで思いを形にしていけることができる。教示を受け絵を描き進める際、「なんとなく描いてしまったけれど、なぜそれを描いたのか自分でもよく分からない」という事態になることもあると思われる。そのような場合であっても、SPM は、絵を描くプロセスと物語を作るプロセスがあるため、段階を踏んで自分の気持ちを整理していくことができる。
自己表現方法	<ul style="list-style-type: none"> 手続きは一定の枠内に収まることからして、表現の幅が限られる。 自己は物語の登場人物に投射され、無意識的に表現される。 「物語化する」ことのみで自己を表現する。 	<ul style="list-style-type: none"> 絵を描いたり、色彩を使ったりと、より幅広い、自分好みの表現が可能となる。 表現が幅広くなることによって可能となった絵の形や色彩が気づきへと結びつく場合もある。 幅広く自己表現できることが必ずしも治療効果に結びつくとは限らない。例えば、エネルギーの低い状態の人にとっては消耗に結びつく可能性もある。その場合は、用紙の大きさを小さくする、4つの課題の途中で終えるなどするとよい。 統合失調症者には SPM は刺激が強すぎる課題となる可能性があり、TAT は適用できても SPM は適用できないこともあるだろう。 「自分を描いてください」という指示が与えられ、「自分」がより意識的に表現される。 自己表現方法が「絵画で表現する」と「物語化する」の二種ある。
解釈	<ul style="list-style-type: none"> ストーリーを作ることが求められるため、内容に深みがあると感じられる。分析や解釈は容易ではないが、ストーリーの流れから被検査者の統制感や合理性を見ることができ、内容やテーマからはパーソナリティの深い心理的側面をはかることができる。 	<ul style="list-style-type: none"> 描かれるモチーフが被検査者の感じている現実世界に即しているため、初学者にもある程度の解釈が可能である。特に、被検査者の自己像と気になっていることを描くという2つのステップがあるため、被検査者の自己イメージと指向性が比較的明確に現れやすく、そのことを話題にしながらその後の面接を進めることができる。
面接場面における有用性	<ul style="list-style-type: none"> TAT の実施は、心理療法や短期の精神分析に入るきっかけとなることがある。 被検査者は無意識領域にあるので、自分の意志で認めようとしないうえ、認めることができないでいる。 	<ul style="list-style-type: none"> SPM のような、クライアント自身が描いた絵が面接机の上にあると、セラピストとクライアントともに面接が進めやすくなるだろう。言葉で表現しづらい場合でも、絵のイメージから、クライアントがどのような気持ちを抱いているのか推測することができる。

面接場面における有用性		<ul style="list-style-type: none"> ・言語だけを用いた面接を行っていて、行き詰まったときに、SPM は流れを変える助けとなるかもしれない。 ・面接を進める上で、今後の面接の方向性を指し示してくれる。 ・今後、どんな話題を面接の中で取り上げていけばいいのかについて、ひとつの手がかりを与えてくれる。 ・幼児にとって描画活動は日常的に慣れ親しんだものであるため、プレイセラピー場面にも導入可能で、負担をかけずにアセスメントをする機会を設けることができる。 ・描画という間接的な表現を用いるため、問題と適切な距離をとって表出することができ、工夫を凝らせば教育現場における集団実施も可能。
治療効果	<ul style="list-style-type: none"> ・TAT は人間関係や社会的態度、願望、不安等、広範なパーソナリティ研究のほか、行動障がい、心身症、神経症と精神病等の査定において役立つ。しかし実施それ自体に治療効果があるというわけではない。 	<ul style="list-style-type: none"> ・「自分の“思い”を表現する」というカタルシス効果がある。つまり表現すること自体が楽しかったり癒しとなったりする可能性がある。 ・絵という媒介を用いて、現在に向き合う作業を促進させる効果がある。 ・抱えている問題を描いてそのまま終わりにするのではなく、隠れているものを描き物語る。それらに心を向けることによって、本来望んでいるものや目標を本人が意識化する可能性もある。その点から SPM の実施には治療的意味も含まれる。 ・SPM を体験する中で、自分という存在や今自分が抱えている問題と向き合うことができ、さらになんらかの気づきを得ることができることから、SPM を実施すること自体に治療効果があると思われる。クライアントは抱えている問題の専門家であり、問題を収めるための方法を知っている。 ・物語を作ることと同様に、絵を描くことや色を使うこと自体が楽しさや癒しへつながったり、逆に、苦痛につながったりする場合がある。

(2) 被検査者の感想からの示唆

以下は、被検査者全 14 名の感想文である。原文のまま示す。

① (M1)

「絵を描いているときは、自分と気にかかっていることは漠然としていた。しかし描き終わったときには、どんなことが気にかかっている、自分ってどんな存在なのかがわかった気がする。ただ気がかりなことを解決するには、鯨のようなものとの出会いが必要な気がする。セラピストに何か語りかけられたわけでもないのに洞察ができてしまった体験だった」

② (M1)

「これから好きな人と仲良くやっていきたいなあ、ということを絵にしてみた。背景は特定の場面が思い浮かばなかったの、温かいイメージにした。隠れているものはなかなかイメージできなかったの、背景のきれいなイメージに合わせて花束にした。左下の女の子が私です。SPM を初めて行ったのだが、私は絵を描くのが好きなため、楽しみながら実施することができた。そのため、絵を描くのが好きなクライアントにとって取り組みやすい検査だと感じた。また、実施方法や教示が他の検査よりも堅苦しくないため、子どもや学生に用いるのにふさわしい検査であると感じた。

特に、面接に慣れておらず、緊張しているクライアントへの導入として用いると良いかもしれない。また、私が実施している際、絵を描いている時や物語を考えている時は自分の現在の悩みや欲求のことは考えずに取り組んでいた。しかし、実際に完成した絵や物語を見てみると、自分の現在の悩みや欲求、心の支えと感じているものなど、現在の自分を表すものが1枚の絵に数多く表れていて驚いた。教示を聞いている時は意識していなかったが、私の「思い」が教示によって無意識的に引き出されていたのかもしれない。そのため、自分の悩みを言語化できないクライアントや子どもへのアセスメントとして用いるのに効果的であると感じた。私が今後病院や学校で子どもと関わる際に、アセスメントとして用いてみたいと思う検査であった」

③ (M1)

「描いているうちに、どんどんイメージが広がった。途中でこう描けばよかったと考えが変わり、少し満足仕切れなかった感じがある。しかし描いているうちに楽しくなってきた、嫌な気持ちはなくなった。描画時間に余裕があれば、どっぴりと浸れると思う。自分が描いた絵だからこそ、よい結末が自然とつくれたと思う。自分の絵に、悪い結末を描きたくなかった感じもする。私自身SPMを体験して、自分の気になっていることを客観的に見るのができたと感じた。また、描いているうちに本当に気になっていることは何か、整理することもできた。最初は漠然と「最近趣味の時間が無い」と思っていたのが、「趣味の時間が無い」→「卓球をする時間が無い」→「時間が足りない」→「時間に追われて、リフレッシュできていない」と考えが変わった。そのため、描いた絵も途中で変えなくなった。SPMを1、2週間に1回ぐらいのペースで繰り返し行うことで、「気になること」が変わり、描かれる内容も変わってくると思う。また、「絵を描く」という時間は楽しく、心を休める時間が取れる。そのため1回でも気持ちさがスッパリすると思うが、繰り返し行うことで、また違った効果が生じると考える。SPMを行うことはTATと異なり、SPMの実施自体に治療力があるように感じる」

④ (M1)

「もともと人を描くのが好きではない…(苦手、あまり描かない)ので、最初に人、しかも自分を

描くということが大変だった。4つのテーマをポツポツ描いていた。まとめようというよりは、各々の位置に迷った。紙が大きく感じたことも関係しているかもしれない。私は実際に両技法を体験して、取り組む意思をもちながらも、TATでは自分で考えたストーリーを検査者に伝えることの抵抗や戸惑いを感じ、SPMでは自分で絵を描いた上で、ストーリーを検査者に伝えることへの抵抗を感じた。このほか、クライアントの内面・世界を教えていただくこと、クライアントがセラピストに教えるという決意・行為そのものの意味がどれほど大切かということ強く感じた」

⑤ (M1)

「絵を描く前は、もやもやしたものがあったが、気になることを描くことによって、また物語を作り、客観視することによって、すっきりしました。イメージはどんどん膨らみました。絵がもともと好きなこともあったと思う」

⑥ (M1)

「この結果を他の人にあまり見られたくない、説明したくないと思った」

⑦ (M2)

「自分のnegativeな思いに直面している感じで、自分は嫌な人間だなあという気がした。この絵を見るのがめったにお会いしない小山先生だと分かっているので、絵も、質問紙も、素直にnegativeな気持ちよくない感じを表出できたと思う。絵を見る人(テスター)が、知り合いだったら、絶対に違った絵になっていたか、絵は同じでも物語は変わってくると思う」

⑧ (M2)

「今気になるものについて描くことに抵抗があった。嘘は描いていないけれど、全部描ききったという感じはしなかった。オブラートに包んで描いたという感じです。絵に描いてみて、あらためて自分の気になることを確認したような感じがする。隠れているものを描くことにも少し抵抗があった。隠れているものというよりは隠れているものが思い浮かんで、そちらははっきりと描くことはできなかった。絵を描くことは好きなので、集中して描けたと思う」

⑨ (M2)

「絵を描くのが好きなので、楽しいと思いながら描きました。しかし、気になることが複数あって、絞るのに少し悩みました。また、背景については

まったく想像していなかったので、考えつくまで少し苦労しました。背景については、日常、身近にある風景を描いたので、あまりイメージが膨らんだようには感じませんでした。非現実的なものを描くというよりは、日常で、身近にあるものを絵にしたように思います」

⑩ (M2)

「クーパーを使用して絵を描くと、少し落ちつくような気がした。背景を描き加えているときに、自分にとって大切なものがあることを、少しずつ再確認できたような気がした。TATとSPMを体験して、最も違いを感じたのは、自分の思考や感情が展開していくスピードの差であった。TATは、空想の話という教示があるため、物語を作っていて多少違和感があったり迷う部分があたりしても、そこにあまり注意を向けずに、物語をとにかく先へ先へと進めていこうとすることが多かった。一方、SPMは、最初に自己像を描くという教示がなされ、絵が苦手な私にとっては少し敷居が高かった。けれど、TATに比べ、「急がなければならない」という感じを受けることが少なく、普段の自分の思考スピードでゆっくりと描画を進められたように思う。絵で表現するために、色々と自分のことを振り返ったり考えたりしたが、その作業を急いで行うことは難しいので、あまり急がされるような感じを持たずに取り組めたのかもしれない。また、気になることを描くときに、普段の生活で気になっていることだけでなく、前の描画が刺激になって気になり始めたことも含めて絵に表現できるのが良かった。日々の生活が忙しくなると、自分の気になっていることを気にする余裕がなくなり、無視してしまうことがある。SPMは、その部分に目を向けてみるきっかけになったように思う」

⑪ (M2)

「もっと描きたかった。他の人の絵が気になった。イメージは膨らまないが、楽しかった」

⑫ (M2)

「気になるものを考えるのが難しかった。逆に背景や隠れているものは、描きやすかった。特に、「隠れている」という表現は、すべてさらけ出さなくてもいいという安心感があった。逆に、「気になるもの」はすべてさらけ出す感覚があったので、やりづらかった」

⑬ (M2)

「描く前は、『絵を描くのがイヤだー』という気持ちでいっぱいだった。描き始めてからは、あまり気にならなくなったが、気がかりなことがたくさん出てきて、あれもこれも描きたかったので、出来上がったものが物足りなく感じた。背景が自分の中でイメージしづらくて、色を塗るだけにした。今回、TATを被検査者として体験し、最も感じたことは図版が怖いということである。4図版の男の人の目がぎょろりとしており威圧するものがある。私は気がつかなかったが、銃や刃物が絵に隠されていて、どこか侵襲性のある絵とも考えられる。ある程度、年のいった大人ならよいが、子どもに実施するにはためらわれる。しかも、それらの図版を何枚も見せ、しかも4分程度の反応をすることが望まれ、かなり負担になることが予測される。

SPMは、カラーを用い、お絵かきのように楽しめ、被検査者への負担が少ない。また現実の問題について描くため、防衛が保たれ、どこか安心して取り組めるとも考えられる。ただ、SPMでは「気がかりなこと」を話すのは抵抗がある人もいるかもしれない。検査者とのある程度の信頼関係がなければ、安心して取り組めないことも考えられる。ただ、完成した作品を通して会話をしたり、関係作りにも役立つという利点があるとも考えられ、2セッション以降の面談に実施するなど、実施方法を工夫することで、自分をさらけ出す不安も軽減できるのかもしれない。TATはその点、自分の問題ではなく絵の主人公の問題として語るため、抵抗を減らすことができる。また、防衛自体を査定できたり無意識レベルが投影されるため、解釈に幅を持たせられるのではないと思う。ただ、TATの解釈が、初学者の自分としては、難しいところもある。SPMは現実の問題のとりえ方など、直接表出するものなので、比較的解釈しやすいように感じた。

SPMは本人の気がかりとしている問題を直接尋ねるものである。問題があるということは、背後にこうあってほしい像があると考えられる。直接は表現されていないが、「隠れているもの」を尋ねることによって、願望が現れることもある。実際、私が描いたのは、気がかりな物としてパソコンを描き、隠れているものは両親の姿であった。改めて振り返ってみると、その背景には、修論が

上手く行けばいいのという願望や、また修了して両親を楽にさせたいという願望があったのではないと思う。ただ、TAT は物語を通した無意識レベルの願望であるが、SPM はカラーを使うことで自分が周りにどう見られたいのか願望が反映されるため、自分という仮面ありきの像が反映される点は多少異なっているかもしれない。

今先程の両親との関係と関連しているが、TAT と SPM はどちらも、現実の人間関係を象徴しうるとも考えられる。SPM については、私の場合、両親との関係が登場したが、この実習で取り扱った事例では、恋人との関係もあり、様々な人間関係が投影される。一方、TAT は、その人が家族や恋人、友人との関係の中で、親和性のあるスタイルが物語に投影される。また、治療関係も査定できる。例えば 16 図版は何も刺激がない状況でどんな物語が展開されるのか、検査時の雰囲気を感じているのかを反映しうる。また、12 B 図版はセラピー場面を反映しやすく、20 図版はセラピーの結末を反映している。今後の治療の方針を立てる上でも、大変有用なものである。

今回、TAT や SPM に初めて触れた感想を述べる。実際、被検査者になることで、そのテストを受けるにあたって、どんな感情を抱くのかを感じられたのがよかったと思う。例えば、TAT の図版を見ていて、気持ちが悪くなったり、現実的な図版と抽象的な図版のどちらの物語が作りやすいかという、好みの要因があったりするのも興味深かった。SPM では、自分が絵を描くことが苦手という前提があり、どこか抵抗を覚えた（描いている途中は、夢中になり気にならなくなった）。被検査者としては、実施した際、抵抗が見られることもひとつの見立てであり、利用できるのかもしれない。しかし、テストを実施する際に、そのような感情を抱く人もいるのだということを考慮するのは、どんなテストでも必要だと思った。また、レポートを作成してみて、TAT の解釈は大変難しいという印象をもった。力動的な点などもっと見るべきところがありそうである。テストを有効に用いるためにも、もっと勉強し経験を積む必要があると改めて実感した」

⑭ (M2)

「描く前はだらだらした感じがあったが、描いた後は集中している感じがした。描いている最中にどうやって描こうかとすごく考えたからかもしれ

ない。自分の不健康な面が現れていないかと、やや過敏になっている面もあるかもしれない。ただ描いている間、どのように描こうか、悩みながら描き進めている感じは、決して嫌なものではなく、どちらかという心地よいものだった」

VI 考察

TAT との比較から SPM の心理療法における有用性の検討を行うこと、さらに TAT が意図することとの比較から心理療法における SPM の視座について検討を行う。同時にアセスメントと心理療法の道具の絡みについても検討する。

(1) SPM の有用性に関する TAT 比較の検討

TAT で語られる物語には被検査者の現在の悩みや欲求の中に、ある「思い」が投射されていることが多く、被検査者に気づかれぬ形で被検査者が今抱いている思いを知ることができる。質問紙法では、被検査者は何について聞かれているのかに気づき、本当の答えを隠して意図的に望ましい方向に回答することがあるが、TAT では検査の本来の目的が被検査者には気づかれにくいいため、被検査者が意識していないような不安や欲求が現れやすい。ここでは SPM と TAT との相違点について、次の 3 点に絞って検討する。

①絵は自分で描く

SPM は表現の自由度が高く、描画の段階から自らが強く関わっていることから、ストーリー立てにも取り組みやすい。しかし反対に自分を表現するという点では抵抗感も強く、取り組む際にエネルギーを要する。そのためクライアントとの関係性を適切に見立てた上で、実施することが重要である。TAT とは異なり、自ら絵を作成しストーリーを考えるため、クライアントにとって嫌なことを強制的に連想させてしまう可能性は低い。一方、TAT では自分の思いを隠そうと意図してストーリー立てることが可能だとすれば、SPM は TAT よりもクライアントの思いにアプローチしやすい技法だといえる。

SPM では、真っ白な紙に一から自分で絵を描くため個人による多様性が増し、それだけ分析や解釈も検査者の主観に左右されてしまいがちだが、個人の特性が色濃く反映される点は意義深い。また「気になるもの」や「隠れているもの」を描か

せることによって、内的なものを意識化させることが期待できる。また描画にどのような題名をつけるかという点も興味深い。しかし、それらの点が逆に侵襲的と受け取られ、被検査者の心理的負担になる可能性もある。

②「今の思い」に焦点をあてる

SPM は実施の意図が明確であるため、実施するセラピストにとっての、まさに「道具」という印象が TAT よりも感じられる。そのため、実施するタイミングや、クライアントの反応に応じて「今、この時点で」「どの部分を」特に取り上げてクライアントとの対話を構築していくのか、見極めが非常に重要である。「気になるもの」「隠れているもの」はクライアントが今抱えている問題であり、それを絵にすることによって、視覚的にも身体感覚的にもじっくりと認識することができる。描画により「今」が鮮明となっていくということは、クライアント自身が「今の問題」に向き合っていくということを意味している。

③「対話素材」としての描画

SPM では「検査されている」という意識をクライアントは持ちにくい。「これで私の何がわかるのだろう」という不安は生じるかもしれないが、この不安は、セラピストがクライアントとの関係性や実施のタイミングを見極めることで軽減される可能性がある。

SPM では、自分で絵を描き、それについて語るため、その人が抱えている問題が、TAT による物語よりも直接的に現れる可能性がある。子どもに対して実施する場合は、SPM の方が導入しやすいのではないと思う。子どもにとっては「お絵かき」や「落書き」は身近であり、言語発達が未熟な幼児にも適用しやすい。一方、絵を描くのに抵抗がある成人などには TAT の導入がスムーズになるかもしれない。

思いの現れ方については、物語には被検査者の現在の悩みや欲求といった「思い」が投映されていることが多いことがわかる。また被検査者に気づかれぬ形で被検査者が今抱えている悩みや欲求を知ることができるのも SPM の特徴といえよう。

質問紙法では、被検査者は何について聞かれているのかに気づき、真の答えを隠して意図的に望ましい方向に回答することがある。しかし、TAT や SPM の場合、検査の本来の目的が被検査者に

は気づかれにくいいため、被検査者が意識していないような不安や欲求が現れやすい。

以上、TAT との比較によって SPM がもつ長所・短所が被検査者によって語られたが、それらをまとめると次のようなことが言えるだろう。

- ① SPM は被検査者の無意識的な部分を引き出し、「今」の心理的状況を理解するのに有用。
- ② SPM は被検査者を多角的に理解するために有用。
- ③ SPM と TAT の共通点は、「ある状況に絡む思いにふれ、その思いをつかみ、収めるまでの心理的経過を心理臨床の場で関わっていく」点にある。
- ④ SPM と TAT の相違点は、「TAT は刺激図（＝絵）が定まっていてクライアントに与えられる。枠組みがある程度決まっているので、査定としての有用性がある。一方、SPM はクライアントが絵（＝刺激図）を作っていく。刺激図としての絵づくりは流動的であり、どのような絵になるかはまったくわからない。ゆえに査定としての有用性は強調できないが、セラピー促進としての利用に価値が見出せる。SPM が査定として果たす役割は貢献の一部とみてよい。

(2) 心理療法のツールとしての SPM の役割

本研究結果、共通点としては「どちらも絵画刺激を扱い、絵画刺激を通してアセスメントする。被検査者の感情や思考、イメージなどをそれぞれ絵図版や描画といった非言語的な媒介に投映する。被検査者は自分のイメージ、想像力を活性化させる」といった点にあり、相違点としては「TAT では、被検査者の悩みや不安、欲求といった被検査者の現在の「思い」は隠され、「思い」はダイレクトには現れにくい。一方、SPM では、「今のクライアントの思い」にふれることができる」などが指摘される。また治療の効果については、TAT はアセスメントにおいて役立つが、実施それ自体に治療効果があるというわけではない。一方 SPM では、「自分の思いを表現できる」というカタルシス効果がある、つまり表現すること自体が楽しかったり癒しとなったりする可能性があること等の知見が得られた。

TAT 創始者である Morgan, C. D. ら (1935) は、TAT をとおして、一連の絵から沸き起こる想像的な物語づくりにより被検査者自身が認識し得

ないファンタジーにふれる点を強調した。その3年後に執筆した「パーソナリティの探求」(Murray, H. A.; 1938)では、TATの実施目的について、図版提示により「文学的創造力を刺激し、隠されたコンプレックスや無意識のコンプレックスを暴露するような空想を起こさせようとする」と指摘した。つまり、全図版は不安、恐れ、悩み、願望などの感情を喚起する内容となっており、これを物語ることで被検査者は「自分の境遇、経験、先入観などを投映する」のである。

TATで取り扱う人格は、欲求と圧力因子を重視するため、全図版は欲求と圧力が生じやすい図版が選ばれた(Murray, H. A.ら; 1943)。

TATの発展に尽くした戸川(1959)は、「TATは空想の物語からその人の人格に関する仮説を作る技術であり、推測の技術といってもよい」と述べている。その戸川が開発した成人を対象としたTAT日本版(1953)および幼児・児童を対象としたCAT日本版(1955)では、物語る部分については「物語りの形式(言語・叙述)」「語り手と絵の関係」「態度」等を明らかにし、分析・解釈についての項目には、欲求因子および圧力因子の種類・対象・水準、内的状態、解決様式、結末のありようが取り上げられている。また牛島義友ら(1958)が作成した「集団TAT検査」では、欲求(権力、愛情、社会的承認、所属、独立)―反応(攻撃、退行、非現実)―結末(幸福、不幸、不定)の3つの項目に関する分析と、個人の関心が社会、家庭、自己のいずれの領域にあるかを見立て、総合的に判定する。

また佐野・楨田ら(1961)がまとめた精研式主題構成検査では、解釈の視点として「欲求―圧力体制」「知的側面(レベル、生活空間の広さ等)」「情意的側面」「指向的側面(生活態度、外界に対する認識様式等)」「力動的側面(生活感情等)」「決定要因(家庭的等)」「病的特徴等」となっていて、戸川の視点と比べて、日常生活をより意識していることがわかる。また安香宏ら(1997)は分析枠の例として、「刺激図の認知(例：うづくまった人物D)」「導入人物(例：男)」「物語の時間的な流れ(例：将来なし)」「物語の結末(例：唐突な結末)」「筋・主題(例：強姦されて泣く女)」「感情調(例：くやしき)」などを取り上げている。このほかに「絵の情景が物語からきちんとイメージできるか」「物語の筋に一貫性と流れがあるか」「現

在、過去、将来のバランスはとれているか」「物語の結末は明るい、暗い、あるいは何も語られていないか」「印象に残る言葉づかいはあるか」「反応時間や物語るときの態度はどうか」など、さまざまな側面から見て、総合的な人格特徴を抽出する。

一方、精神分析的視点から赤塚(2008)はStein, M. I. (1955)を引用しながら次のような独自の視点を提供している。分析の視点としては、『反応時間(一般的には20秒以内に初発反応がみられる、一般的には4分以内にTAT物語を作り終える、どの図版、どういう状況で沈黙が見られたか)、『現在、過去、未来に関する叙述の有無と叙述量(一般的には現在に関する叙述量が多くなる)』、『課題解決(課題解決の方向性)』、『主人公について(主人公が被検査者と離れている場合は、受け入れられない自分を投映している場合が多い)』、『主人公の欲求―圧力の分析』、『図版のテーマから母子、父子、家族関係およびセクシャリティ等の分析』などである。TATは周知のとおり、さまざまな立場から取り扱われており、分析方法も定まらない。しかしあくまでも言語および非言語反応を解釈・分析するという立場は共通していると考えられる。「アセスメント」という性質を濃厚にもつ道具と言える。

一方、SPMは取り扱いが現実の世界であったり、ファンタジーであったり、ありえない願望の世界であったり、描画者の今の気持ちのありようでいかようにでも変化する。「思い」とは本来時制を問わない、浮遊状態の心のありように喩えられるという認識が背景に横たわっている。そして「思い」には、思いの内容、質、深さが関係する。思いの深さで見れば、とくに悩みといったものは感じないし、問われなければ気づきもしないというレベルから、何かにとらわれ、想像やファンタジーといった個人の体験等が再現されやすいレベル、そして直面せざるを得ないレベルまでさまざまな様態がある。悩みが深いときには、その人の今の思いが現れやすい。自分の思いを明確に掴み取る様態から、不明瞭な思い、そして何かあるが自分でもよくわからない思いのレベルまで様々あることがわかる。思いの深さ、質は思いの内容に直接・間接的に影響を与える。SPMでは、今のその思いがなぜ再現されたのか、その要因について深くはふれない。再現されたものがその人の「思い」

に絡んでいるかどうかを見定め、絡んでいると思われるときには真摯にその“思い”に向き合うようにする。ある思いが生じるとき、ある内的・外的体験が私を突き上げるという衝動体験を伴うことがある。これは TAT のねらいと少し似ている。TAT はあくまでもアセスメントという枠組みの中で開発され研究がなされてきたが、SPM は心理臨床の中で活用するアセスメントを兼ねた心理臨床道具という位置づけが相応しい。TAT との関連でいえば、TAT がこれまで個人が獲得した欲求一圧力指向性に着目するのに対して、SPM は山本（1992）が示した体験論的な心理療法である「TAT かかわり分析」という方向性と絡む。

文献

- 赤塚大樹（2008）TAT 解釈論入門講義 培風館。
安香宏・藤田宗和編（1997）臨床事例から学ぶ TAT 解釈の実際 新曜社。
Jung, C. G. (1921) : Psychologische typen. (林道義訳 1987 タイプ論 みすず書房, 354-439.)
小山充道(2002) : 『思いの理論と対話療法』 誠信書房 95-180。
小山充道(2004) 「自分描画法研究——保育園児から 40 歳代まで適用の結果わかったこと」 日本心理臨床学会第 23 回大会発表（東京国際大学）。
小山充道(2006) 「脳外科手術を受けた女子中学生の苦悩と心の成長」 日本心理臨床学会第 25 回大会発表（関西大学）。
小山充道(2007) 「高齢者の自分描画法～成人資料との比較」 日本心理臨床学会第 26 回大会発表（東京国際フォーラム）。
小山充道編著(2008) 必携臨床心理アセスメント 金剛出版 299-313。
小山充道(2013) 「幼児の自分描画法」 日本心理臨床学会第 32 回大会発表（東京大学）。
小山充道(2008) : 「自分描画法」『小山充道編著 必携臨床心理アセスメント所収』 金剛出版, 374-378。
小山充道(2012) : 「TAT」津川律子編著 投映法研究の基礎講座所収』 遠見書房, 104-27。
Morgan, C. D. & Murray, H. A (1935). "A method for investigating fantasies." Archives of Neurology & Psychiatry, 34, 289-306.
Murray, H. A. (1938) Explorations in Personality. — A clinical and experimental study of fifty men of college age. Oxford University Press. (外林大作訳編 パーソナリティ I (1961) 第 3 章 人格の変数 133-224. & パーソナリティ II (1962) 18. 主題統覚検査 500-514. 誠信書房)。
Murray, H. A. and the Staff of the Harvard Psychological Clinic. (1943) Thematic Apperception Test - Manual. Harvard University Press.
牛島義友・野村勝彦（1958）「集団 TAT 検査の手引き 改訂版」と「集団 TAT 検査用紙」 金子書房。
佐野勝男・楨田仁・坂村裕美（1961）精研式主題構成検査解説——児童・生徒用（本検査は TAT・BG 版図版，児童・生徒用整理用紙で構成） 金子書房。
佐野勝男・楨田仁（1961）精研式主題構成検査解説——成人用（本検査は TAT・MF 版図版，成人用整理用紙で構成） 金子書房。
戸川行男編（1955）幼児・児童絵画統覚検査解説：CAT 日本版 金子書房。
戸川行男（1953）TAT 日本版 絵画統覚検査解説 金子書房。
戸川行男・村松常雄・児玉省ほか監修（1959）TAT（心理診断法双書所収）；戸川行男「TAT 概観」 2-37. 中山書店。
戸川行男代表，臨床心理学研究会編(1953)「TAT 日本版試案 1 絵画統覚検査図版」と，「早大版 TAT 絵画統覚検査用紙」金子書房。
戸川行男・本明寛・松村康平他共編（1955）「CAT 日本版試案 幼児・児童絵画統覚検査図版」と，「早大版 CAT 絵画統覚検査用紙」金子書房。
Stein, M. I. (1955) The Temantic Apperception Test. Addison Wesley.
山本和郎(1992) 心理検査 TAT かかわり分析——ゆたかな人間理解の方法 東京大学出版会。